J. of Kyushu Univ. of Health and Welfare, 7：153 ～ 159, 2006

健常児の人物画の発達

今給黎　禎子　　藤原　雅子　　安川　千代　　松山　光生　　山田　弘幸　　倉内　紀子　　笠井　新一郎

The drawing development of normal children

Teiko IMAKIIRE　Masako FUJIWARA　Chiyo YASUKAWA　Mitsuo MATSUYAMA　Hiroyuki YAMADA
Noriko KURAUCHI　Shinichiro KASAI

Abstract

The purpose of the present study was to analyze the figures drawn by normal children in order to investigate the drawing development of normal children. Initially, 79 normal children aged 3-5 years were asked to draw a picture of a father. Using the grading scale of the Draw-A-Man (DAM) test, a childcare professional evaluated the children's pictures. The results indicated that while two 3-year-old children were not able to draw a figure, the remaining 3-year-old children could draw 17 items on the DAM grading scale and primarily drew a face. In addition, the 4-year-old children were able to draw 27 items, but they did not draw the man's trunk, and while the 5-year-old children were able to draw 31 items, they were not only able to draw the trunk, but also drew small parts, such as clothes or glasses, in detail. The present results clarified the features of drawing development in normal children. However, it remains necessary to examine in detail the relationship between children's drawing development and language development.

Key words：a figure painting, Draw-A-Man test, drawing development, normal children
キーワード：人物画、グッドイナフ人物画知能検査、描画発達、健常児
2006. 1 .18 受理

はじめに

描画は心理検査や発達検査など様々な分野で活用されている。描画についての先行研究は多く、特に子どもの描画発達については一定の順序があり、子どもの成長によって多少の早さの違いはあるものの、ほぼ同じ発達の道筋を辿るとされている[1)]。また、自閉症児の描画発達についての研究では、遅れと質的な偏りがみられるものの、健常児と同様の経過を辿ることが明らかとなり、さらに描画発達と言語表出の発達とは関連があったと述べている[2)]。さらに、描画発達と言語理解の発達にも関連があったという報告もある[3)]。

描画課題は言語指示を必要としないため、発達障害児の評価として有効に活用できる可能性があると考える。そこで、その前段階として、本研究では健常児の人物画をいくつかの視点から分析することによって、人物画の発達の特徴を知ることを目的とした。これによって、今後、障害児の描画発達の順序性や特徴などを抽出し、それを活かして障害児により適した言語評価・訓練プログラムを立案する一助とするための検討を行った。

方法

1．対象

A保育所に通う 3 歳～ 5 歳児 90 名。このうち、健常発達を遂げていることが確認できた 79 名を分析対象とした（表 1 ）。内訳は、3 歳児 30 名（男児 12 名、女児 18 名）、4 歳児 25 名（男児 12 名、女児 13 名）、5 歳児

九州保健福祉大学　保健科学部　言語聴覚療法学科
〒 882-8508　宮崎県延岡市吉野町 1714 番地 1 号
Department of Speech-Language-Hearing Therapy,School of Health Sciences Kyushu University of health and welfare
1714-1　Yoshino-cho,Nobeoka city,Miyazaki prefecture

24名（男児7名、女児17名）であり、最年少児は3歳1か月（以下、3：1）、最年長児は5：8であった。なお、本研究の実施に際して、関係者の同意を得た。

表1　対象児の男女の割合

年齢	平均年齢	男児	女児	計
3歳	3：6	12	18	30
4歳	4：6	12	13	25
5歳	5：3	7	17	24
計		31	48	79

2．評価方法

描画課題については、1人につきA4判普通紙1枚と鉛筆、消しゴムを用意し、グッドイナフ人物画知能検査（以下、DAM）の実施手順に従って父親を描かせた。保育士が教示を行い、「お父さんを描いてね。頭から足まで全部描いてね」というように、父親の全身を描くよう促した。ただし、父親がいない場合には母親でもよいとした。

言語発達の評価については、言語能力発達質問紙（以下、質問紙）の記入を担当保育士に依頼した。運動面や社会面等の言語面以外の発達についても、担当保育士に確認をしてもらった。また、「多動、興味の持続ができない、ことばが遅いような気がする」など、子どもと関わる上で気になっている点がある場合には、その旨を備考欄に記入した。

3．分析方法

描画はDAMの採点項目50項目を基準に、その項目が描けているかについて採点を行った（表2）。そして、3～5歳の生活年齢別に人物画の特徴や発達の様子などについて分析を行った。言語発達については、質問紙の評価結果と児の生活年齢を比較し、遅れの有無をみた。

結果

1．対象児と人物画の描画の可否について

今回、人物画を描けなかったのは3歳児2名（3：6、3：10）であった。4歳児、5歳児で人物画が描けない児はいなかった。

言語発達については、質問紙より遅れは認められなかったものの、保育士からみて「気になる子」は3歳児で1名、4歳児で3名、5歳児で4名いた。内容としては、落ち着きがない、多動である、思い通りにならない時には椅子を投げる等の癇癪がある、理解力が低くオウム返しになる、話し出す際に音を伸ばすなどであった。

2．採点項目について

採点項目50点の中で1人も描いた児がいなかった項目は19項目あった。内訳は27. 腕の割合、28. 指の細部、34. 腕および脚の輪郭、36. 肩あるいは両脇の関節、38. 掌、41. 脚の関節、42. 鼻と口の輪郭、43. 横向きA、45. 顔貌、46. 顎の突出、47. 衣服の種類完成、48. 拇指の分化、49. 横向き、50. 描線Bであった。よって、今回はこの14項目を省いた36項目について検討を行った。

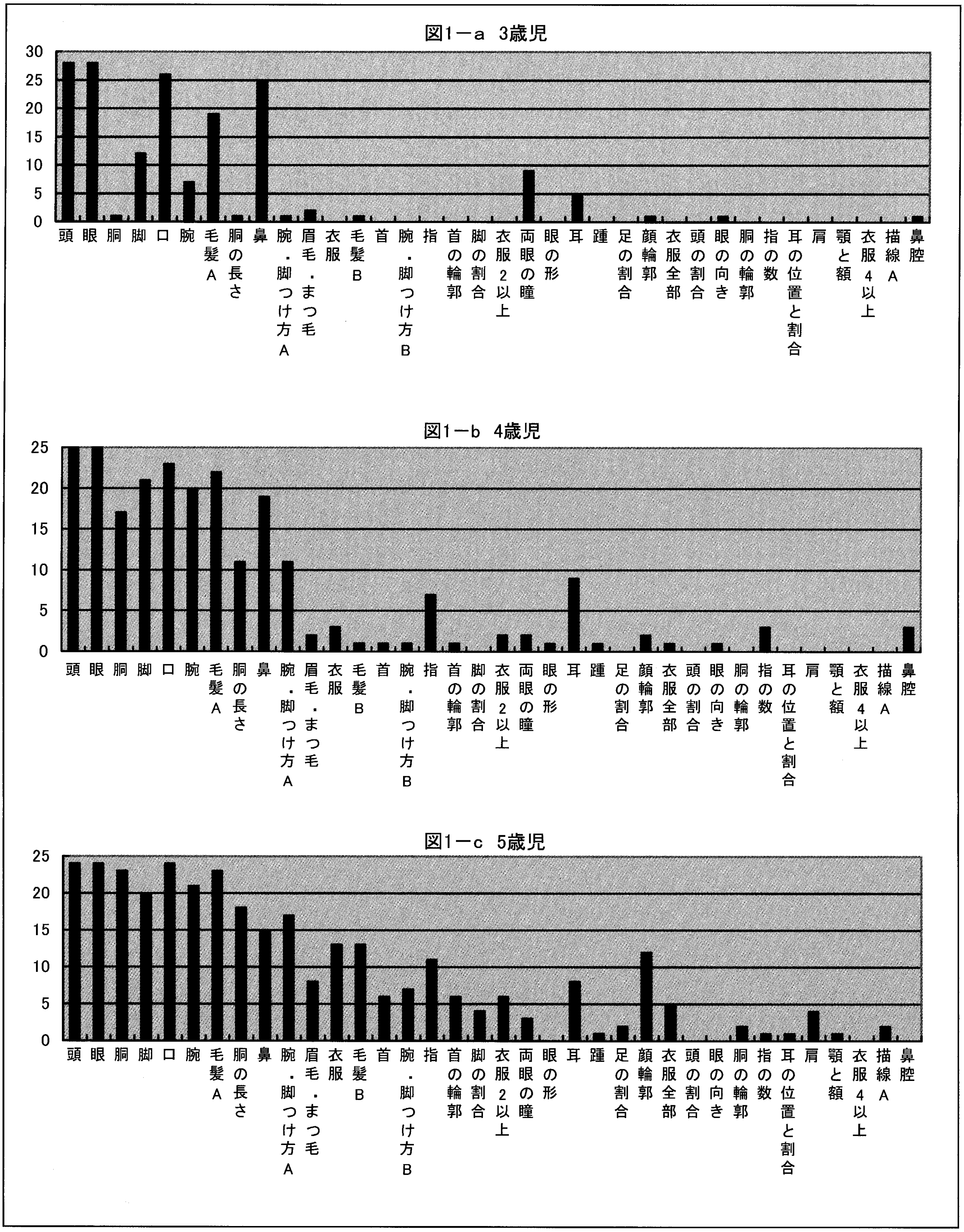
3．年齢別にみた人物画

年齢別にみた人物画の構成項目を図1に示した。

3歳児では17／36項目を描いており、7割以上の児が描くことができた項目は頭・眼・口・鼻の4項目であっ

表2　DAMの採点項目

1．頭	26. 衣服の全部
2．眼	27. 腕の割合
3．胴	28. 指の細部
4．脚	29. 頭の割合
5．口	30. 眼の向き
6．腕	31. 胴の輪郭
7．毛髪A	32. 指の数
8．胴の長さ	33. 耳の位置と割合
9．鼻	34. 腕および脚の輪郭
10. 腕と脚のつけ方A	35. 肩
11. まゆまたはまつ毛	36. 肩あるいは両脇の関節
12. 衣服	37. 顎と額
13. 毛髪B	38. 掌
14. 首	39. 衣服の部分4つ以上
15. 腕と脚のつけ方B	40. 描線A
16. 指	41. 脚の関節
17. 首の輪郭	42. 鼻と口の輪郭
18. 脚の割合	43. 横向きA
19. 衣服2以上	44. 鼻孔
20. 両眼の瞳	45. 顔貌
21. 眼の形	46. 顎の突出
22. 耳	47. 衣服の種類完成
23. 踵	48. 拇指の分化
24. 足の割合	49. 横向き
25. 頭の輪郭	50. 描線B



※点線は各年齢での7割

図1　年齢別にみた人物画の構成項目

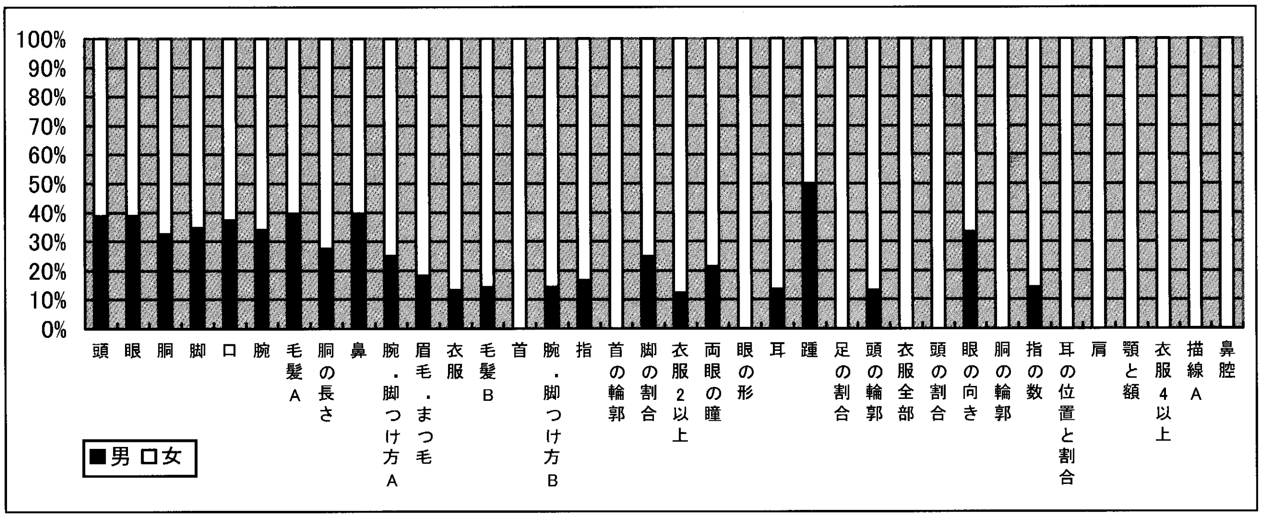
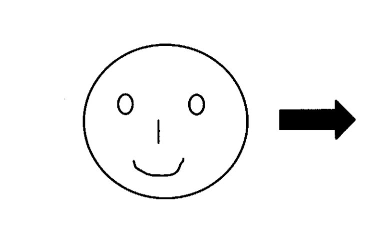
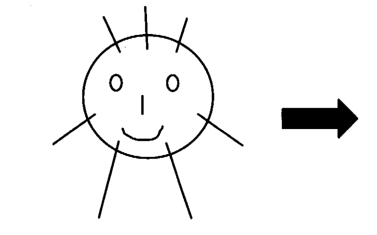
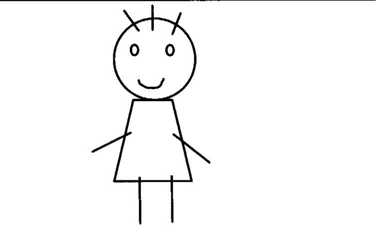
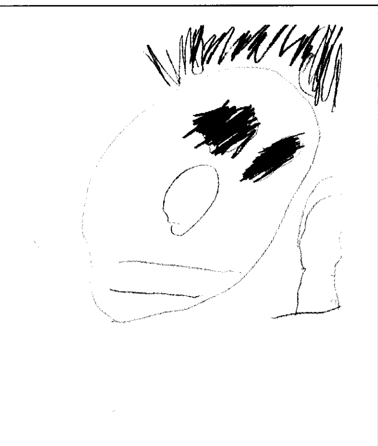
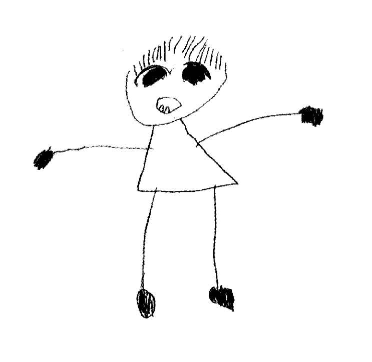


図2　男女別にみた人物画の構成項目

図1　各年齢における人物画の変化

	3歳児	4歳児	5歳児
図式			
項目	頭・眼・口・鼻	頭・眼・脚・口・腕 毛髪A・鼻	頭・眼・胴・脚・口・腕・毛髪 A・胴の長さ・腕脚のつけ方A
例			
年齢	3：3 男児	4：1 女児	5：1 女児

た。7割以下の項目で多かったのは、毛髪A、脚、両眼の瞳、腕などであった。なお、この時期の人物画は顔のみ、または「頭足人間」に腕がくわえられたものとなっていた。「頭足人間」とは、頭と脚だけでできているもので、ドイツの児童心理学者によって述べられた[4)]。また、7割以上の児が描くことが可能であった項目を図式化すると表3のようになり、実際に描かれた絵と比較してみた。この児の場合には、顔に毛髪を加えて描くことができていた。

4歳児では27／36項目を描いており、7割以上の児が描くことができた項目は頭・眼・脚・口・腕・毛髪A・鼻の7項目であった。7割以下の項目で多かったのは、

胴、胴の長さ、腕脚のつけ方A、耳などであった。この時期は、３歳時にはほとんど描くことのなかった胴を描く児が大幅に増えているのが大きな特徴であるが、胴の長さにまで配慮できる児はまだ少ない段階であった。また、衣服や指を描く児が出現してきたのもこの時期の特徴である。表３の児の場合には、さらに耳を描き加えることができていた。

５歳児では、31／36項目を描いており、７割以上の児が描くことができた項目は、頭・眼・胴・脚・口・腕・毛髪A・胴の長さ・腕脚のつけ方Aの９項目であった。７割以下の項目で多かったのは、鼻、衣服、毛髪B、顔の輪郭などであり、輪郭や割合を考慮できるようになってきていた。また、眼鏡や髭、リボンやイヤリング等の細かな部分まで描くことができていた。しかし、その一方で以前描くことができていた鼻が７割以下と少なくなっていた。表３の児の場合には、胴のバランスがとれており、顔の輪郭も実際の形に近くなっていた。また、歯という細かい部分を描くことができていた。

４．男女別にみた人物画

男女別にみた人物画の構成項目を図２に示した。男児は23／36項目を描いており、首や輪郭・割合への配慮はみられなかった。女児は36項目全部を描いていた。男児よりも女児のほうがより細かな部分まで描くことができており、女児のみが描いた項目は首、首の輪郭、眼の形、足の割合、衣服の全部、胴の輪郭、肩、顎と額、衣服の部分４つ以上、描線A、鼻腔であった。

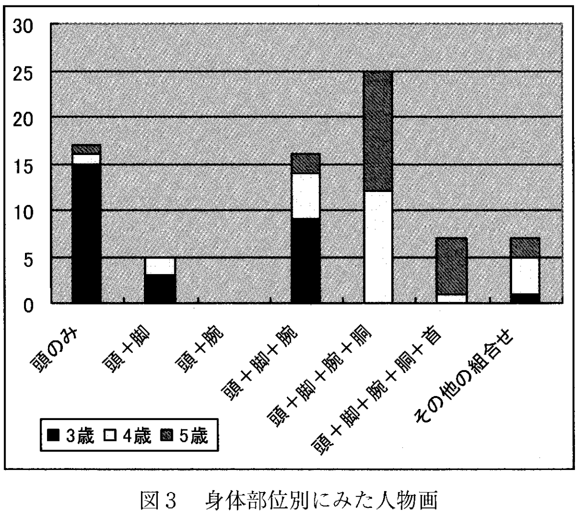


図３　身体部位別にみた人物画

５．身体部位別にみた人物画

人物画を構成する要素を大きく「頭・首・胴・腕・足」の５つに分類し、年齢ごとに比較した（図３）。その結果、３歳児は頭のみを描く児が最も多く、次いで頭＋脚＋腕、頭＋脚を描いていた。４歳児では頭＋脚＋腕＋胴の４要素を描く児が最も多く、次に頭＋脚＋腕の３要素で人物画を構成していた。５歳児では４歳児と同様に頭＋脚＋腕＋胴の４要素を描く児が最も多かったが、次に多かったのは頭＋脚＋腕＋胴＋首の５要素であった。いずれのグループも、頭＋腕を描いた児はいなかった。その他の組合せとしては、頭＋胴、頭＋胴＋脚などがあった。

６．その他

表情についてはほとんどが笑顔であり、口角が上がっているように曲線で描かれていたり、半円形で描かれたりしていた。

人物画の性別が明確に分かるのは５歳児の描画であり、衣服やひげ、アクセサリー類によるところが大きかった。

考察

１．人物画の発達の特徴

３歳児の人物画は、顔のみであり、眼・鼻・口が描かれていた。４歳児になると、顔のみであった人物画に脚と毛髪が加えられた。この時期は、完全に胴を描いている訳ではなく、頭足人間になっていることが多かった。５歳児になると胴を大部分の児が描くようになり、その胴もバランスが取れてきており、横幅より縦の長さが長くなっていた。さらに腕も加えられた。この時期は輪郭や割合といった全体のバランスが整い始める時期であるが、その一方で、３、４歳時には描かれていた鼻が消失した。その他に、衣服や眼鏡といった装飾品などが充実してくる時期でもあった。このように、生活年齢が上がるにつれて人物画を構成する要素は増加し、装飾品や各身体部位が全身に占める割合など、より細かな部分にまで配慮して描くようになることが分かった。

描画の発達について、ヒトは２歳あるいはそれ以前よりなぐり描きをするようになり、そのパターンは20種類に分類されている。これらを描くにあたっては、視覚的ガイダンスが必要なわけではなく、眼によるコントロールなしになぐり描きの全てのパターンを描くことができる。そして、それらのなぐり描きのパターンを組合せて我々は絵を描いているが、初めて人物画が出現するのは３歳前後とも43か月（平均）とも言われている[5]。描画発達と並行して言語面も発達を遂げ、描いたものに命名する、また、命名した絵の内容を説明しようとする。この象徴期を経て、子ども自身がイメージしたものを描出できるようになっていくのである。子どもが絵を描けるようになるためには、①認知機能の発達、②自己表示・

表現意欲、③イメージの形成、④手先の巧緻性の以上４点が大事な要因であるとされている[1)]。描画活動は運動発達だけでなく、言語や探索活動など様々な側面と密接に関わりながら発達していることが分かる（図４）。健常児の描画の発達順序や特徴を知っておくことは、今後障害児の描画を検討するにあたり非常に重要であり、健常例と障害例とを比較検討することによって、障害児特有の描画の傾向を探る手がかりとなると思われる。

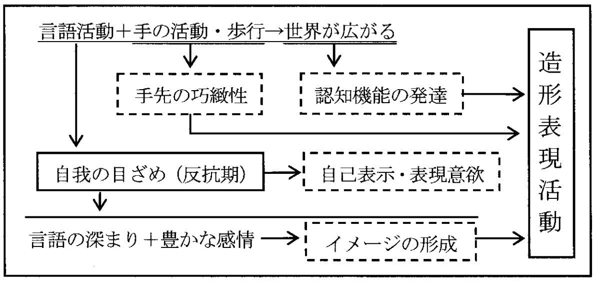


図４　幼児の造形表現活動の黎明[1)]

２．人物画における身体部位の描き方

どの年齢でも頭と眼は必ず描かれており、中には顔の輪郭が重なり円で描かれている中に、眼が円ではっきりと描かれているものがあった（図５）。眼は顔を構成する要素の中で最初に描かれるものであるということであり、最も関心のある部分であると考えられる。また、脚よりも腕の方が後から描かれていた。子どもは人物画を描きながら、腕と髪と耳が同じような場所で競合する、つまり頭部を表す単一の円に書き足されるということに気付くという。そして、その解決法として、どれかを省略するのである。その結果、毛髪よりも腕を省略する児が多く、毛髪と腕とを一緒に描く児はめったにいないといわれている[5)]。本研究でも頭と腕を一緒に描いた児は、どの年代にもみられず、先行研究の結果を支持するものであった。また、頭足人間に胴体が存在しないのは、幼児にとって胴体が直接関心のある手足や顔に比べて関心が薄いためであると考えられている[1)]。これを表しているかのような描き方の人物画を図６に示した。手足がバラバラの状態で描かれているが、手足それぞれの形はそれと分かる形になっている。これらのことより、人物画から幼児が身体のどこに強い関心があるのかを知ることができる。

３．年齢間での要素の比較

年齢が上がるにつれて、構成要素も増加することが分かった一方で、この結果と矛盾する要素があった。３、４歳児が描いていた鼻腔は、５歳児では一人も描いていなかったのである。これは、人物画の質そのものが変化したことによると考えられる。この時期の人物画は漫画のキャラクターのような絵になる傾向があり、これは女児に多く認められた。その結果、鼻腔だけでなく鼻自体をわざと描かない児も存在した（図７－ａ）。これと同じことが「両眼の瞳」にも起こっていた。眼を顔面のあるべき位置に配置するだけではなく、表情を加えることができるようになってきたため、片目をウインクさせたり（図７－ａ）、両目とも孤で描いて微笑んでいる様子を表現したりする（図７－ｂ）という描き方がみられた。

絵の描き方については、子どもの絵の表現の発達には順序性があるが、指導のあり方や個々の子どもによって個人差があるので、年齢とは一致しない面があり、流動的に考えるとされている[1)]。兄弟姉妹のいる児ではその影響を受けていることが多々あり、特に眼の描き方など、漫画キャラクターのような描き方をしており、生活年齢よりも発達した絵を描いている児をみることもある。ＤＡＭの採点項目は、通過率の高い順序で配列がなされている。しかし、年齢的に描かれていてもいいはずの項目が必ずしも描かれていない場合もあれば、反対に年齢的には描くのが難しいと思われる項目が出現してくることもあり得ることが分かった。

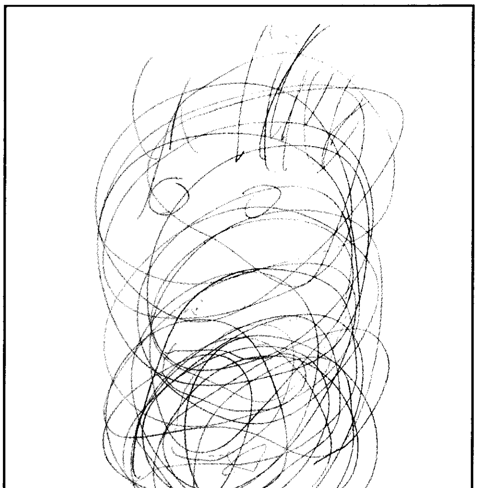


図５　眼への関心が強い人物画

今後の課題

今回は課題実施を担当保育士に依頼したため、実際に描画する様子をみることができなかった。次回は描画をしている時の児の様子や人物画の描出の順序、描きあげるまでの所用時間等、人物画を描きあげるまでの過程に

図6　手足の描き方が特徴的な人物画

図7-a　5：6　女児

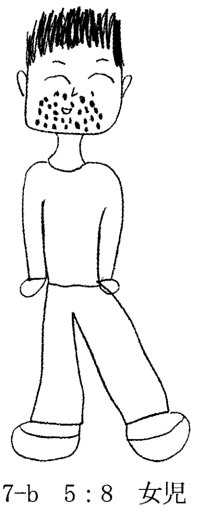


図7-b　5：8　女児

図7　漫画キャラクター様の人物画

も注目して、ビデオ分析等を行いたい。また、対象児を年齢ごとに分けて分析を行ったが、次回は月齢で区切り、より詳細に分析を行うことが必要であると考える。

保育士が「気になる子」として挙げた児には、今後精査の実施が必要であると思われた。今回用いた質問紙は言語発達を短時間で大まかにとらえることが可能なものであり、言語発達の偏り等の詳細については把握できず、普段から気付かれにくい軽度発達障害などは発見することができないものであった。そのため、次回は言語発達に問題が疑われる児を対象として、言語発達と描画発達とについて評価・分析を行いたいと考える。

謝辞

ご協力くださいましたA保育所所長 新土百百子先生と諸先生方、お子さんたちとその保護者の方々に深く感謝申し上げます。

引用文献

1）東山明，東山直美：子どもの絵は何を語るかー発達科学の視点からー．日本放送出版協会，東京，1999.
2）松瀬留美子，若林愼一郎：自閉症児の描画表現に関する発達的研究－言語発達と描画発達との関連についてー．小児の精神と神経 41，271 － 279，2001.
3）今給黎禎子：広汎性発達障害児の描画発達と言語発達の関連について．九州保健福祉大学保健科学部言語聴覚療法学科 卒業研究論文集，2003.
4）ヘルガ・エング（深田尚彦訳）：子どもの描画心理学－初めての線描き（ストローク）から8歳時の色彩画までー．黎明書房，名古屋，1999.
5）ローダ・ケロッグ（深田尚彦訳）：児童画の発達過程－なぐり描きからピクチュアへー．黎明書房，名古屋，1998.